P－13

上顎犬歯を牽引せずに口腔内へ誘導できた一例

○伊東泰蔵*)宮崎明日香**)宮崎修一**)樋口学***)
*)いとう歯科**)みやざき歯科・こども歯科
***)アイ歯科矯正歯科

【目的】

本症例は上顎中切歯が未萌出ということで来院された。そこで犬歯の埋伏方向に異存を感じながらも側切歯が口蓋側に萌出したために犬歯の牽引も考慮しながら矯正治療（MTM）を開始した。乳犬歯の抜歯や第一小臼歯の連続抜去により犬歯萌出が誘導され、歯列期にほぼ同時に萌出したので報告する。

【症例】

患児：８歳２ヵ月　男子
初診：平成20年4月5日
主訴：永久歯が出てこない
既往歴：特記事項はない
現病歴：上顎中切歯と他の永久歯歯数を確認した後、上顎犬歯歯胚の位置や方向を説明し観察とした。1年後側切歯が口蓋側に萌出してきたので矯正治療（MTM）を開始した。

【結果】

2009年 9月　LA装着し側切歯を唇側へ
2010年 3月　乳犬歯を抜歯、第一小臼歯萌出
　　12月　左側第一小臼歯抜歯　CT撮影
2011年 6月　犬歯の位置は対照歯と同じ経路
2012年12月　左側犬歯歯冠の一部萌出
2014年 7月　両側犬歯は萌出完了

【まとめ】

1）経過観察中において、X線の読影が重要であり、比較しながら方向や位置の確認で治療法を検討した。
2）対照歯との萌出比較も重要であった。早い時期における開窓術は回避できた。
3）犬歯の萌出完了後、正中離開が著明で歯間部が約４㎜以上であったが自然閉鎖を観察。
4）初診から4年４ヵ月で犬歯は萌出完了した。
　対照歯との萌出時期の差は認めなかった。

P－14

側方歯群交換期にホールディングアーチを装着して上顎犬歯の頬側転位を防いだ症例

○國武　哲治
くにたけ小児歯科医院（福岡市）

【目的】

小児歯科臨床において、側方歯群交換期に上顎犬歯が頬側位より萌出することに時々遭遇する。一因として、犬歯の萌出余地不足が疑われるが、ホールディングアーチを装着することで第二乳臼歯と後継永久歯である第二小臼歯の歯冠幅径の差を利用し頬側転位を解消できないか試みた。

【症例】

初診時年齢7歳3ヶ月の男児で、10歳2ヶ月の定期健診時上顎右側犬歯の頬側位よりの萌出を気にしていた。側方歯交換期で残存乳歯は上下左右の第二乳臼歯でアングルは咬頭対咬頭であり、軽度の上顎両側犬歯の頬側転位が見られた。そこで、上顎第一大臼歯を支台にしたホールディングアーチを装着し経過観察を続けた。永久歯との交換終了を確認した10歳11ヶ月に装置を撤去した。上顎側切歯遠心面から第一大臼歯近心面までの空隙量は、ホールディングアーチ装着時右側23.0mm左側25.4mm撤去時右側23.0mm左側24.2mmで、側切歯の位置が不変と仮定するならば空隙は右側では維持され左側では1.2mmのロスがあった。装置撤去時、左右犬歯の頬側転位は解消されアングルはⅠ級となった。

【考察】

萌出余地不足が見られる症例において、リーウェイスペースを念頭に入れ遠心位にある乳歯の近心面をスライスすることで対応しているが、削合の量や時期を含めた空隙の管理は難しい。上顎第一大臼歯は空隙があると近心移動するといわれている。上顎第二乳臼歯と第二小臼歯の歯冠幅径の差は平均で2.33mmであることから、今回ホールディングアーチを装着することで第二乳臼歯交換時の第一大臼歯の近心移動が起こらずに2mm程度の萌出余地不足は解消し犬歯は歯列内に整列することができたと思われる。また、資料がそろっていないので検証はできないが記録によると、二次的に上下の咬合関係は咬頭対咬頭からⅠ級に導けた。一方、同様の状況でそのまま経過観察した症例では萌出余地不足はどうなったかを提示するので、はたしてこの装置装着が有用であったかご意見を伺いたい。